

## 城井合戦附黒田長政敗北之事

宇都宮鎮房は、赤郷に牢居し、時節を待けれ共、秀古より何たる沙汰もなかりければ、退屈の心出来にけり。朝房も、此事を無念に思ひ、父鎮房に向て申しけるは、いつまでかくてながらうべき、最早兵も減じて宗徒のものばかりなり。かくあらば、兵も次第に落失て後、いか程思ふとも甲斐あるまじ。当家代々の武功此時に至りて、むなしくならん。

勝信しかじかでのつくろひもなく見へ候得ば、只本城へ御かえり有て、城代大村を追出して籠城に及ばば秀吉にその聞こえありて、いづれの沙汰にも及べし。かくて末々勝信が幕下となりて朽果てん。

黒田討手として向ふとも、要害の地なれば、謀はいくらも有べし。大敵を引請、戦場に骸をさらし、名を後代に残し度候へば、いざ去らせ給へと有ければ、鎮房もつともと同心し、天正十六年十一月下旬、赤檜を打立て、城井に押寄、城代大村を追い出し、合戦の用意その聞こえ隠れなければ、討手として黒田甲斐守長政、毛利輝元より勝間田彦六左衛門を大将として、長政に加勢し、都合その勢一万余騎、城井より二里を隔て、岩丸山に陣を取、鎮房敵陣を見すまし、明日寄来る山筋こそ究究の所なれとて、其夜密に敵陣一里を隔て、

かさみかさみの岩陰に弓の兵を伏せ、後に槍長刀の兵あまた伏置、加へて近所の民共、老若をとはず教百人、白装束を着せ、竹竿を持せ、山の脇、又は峯にかくし置て、合戦始らば起あがりて関を作る体をなすべしと、言含めたり。これは敵に思の外大勢なりと思はせ、気を奪うべきためなり。さるほどに、寄せ手是をは夢にもしらず、たとへ城の要害よく共、僅かの小勢にて籠りたれば、一時に攻略すべしとおもいあなどり、先一番に長政の侍大将大野小弁。二番は勝間田彦六右衛門、三番には長政段々に山の尾崎をおめいて登る。抑、此岩山丸と申すは、城井郷に継いで左右嶮き谷にて、一筋の尾崎ならでは上る事ならざる所なり。敵、何心なく打通る時、伏たる弓鉄砲の者共、颯と駆出て散々に射る。思ひよらざる事なれば、寄手道に迷い戦う所に、後の伏勢関を挙げ、会釈もなくかけ落す。寄手の兵、爰を引かんとすれば城井勢かさより打てかかる。進退ついに迷い山より下へまくり落され、遥かの深き谷底に落重なり、敵に逢て討死する者より、己が槍長刀につらぬかれて死する者数を知らず。城井勢勝ちに乗て追かくれば、寄手一返しも返さずして主討たるれ共従者は知らず。親討るれども子はしらす。蜘蛛の子をらすが如く四方八方へ逃ちりぬ。寄手先陣の大将大野小弁も、塩田内記に懸合終

に討れ、勝間田彦六左衛門も新見荒次郎に討れぬ。其外八百六十余人討取けり。追討は数をしらす。去る程に長政は主従十騎計にて落ける所に、城井が兵二十騎計追かけて討ければ、長政の郎等一騎二騎宛返し合せ合わせて討死す。その間に長政遙かに落延て、僅に主従二騎にて馬岳城にぞ人にける。宇都宮の兵共、その夜馬岳に押寄て長政を討取んと云けれ共、鎮房宜ぶるは、長政に對して籠城するに非ず。かく浪人の身と成で朽果んより、いったん籠城して殿下秀吉の御沙汰に頂らんためなれば、長政討取事無益なりとて、制し給ひければ、夜討の事は止りぬ。共後いよいよ用心深くかまへたり。